

四谷の

千枚田だより



第 143 号

暑い熱のこもった「おもてなし」が行われた。この「おもてなし」が後々の

シンポジウム開催にあたって

平成十七年九月二日・三日、第一回全国棚田(千枚田)サミットを開催してから、はや十年になる。

鑑みると、現地見学会ではサミットを成功させようと地域住民が立ち上がり、実りの九月に耕運機で田んぼの代掻きや田植え、昔の脱穀、また、九六鋤衆に扮して鋤やモッコウ、木馬を使つての棚田造成等々の実演、また、嫁つこや小母あゝの湯茶



の接待、小学児童による千枚田野外学習の現地発表など村を挙げての

サミット開催地の現地見学会のお手本ともなり、語り草ともなっている。

連谷地区において世紀来の大イベントを地域力で大成功に治めることができた。保存会も耕作農地に囚われなく「四谷の千枚田」を連谷地区、「地域の宝」と位置づけた。

その一つとして平成二十一年から五年間、「あいち森と緑づくり環境活動・学習推進事業」の採択を受け各種事業に取り組んだ。

環境活動では灌木茂る方瀬の根道、与良木の隧道から方瀬、稲目、また、松下の見通しが悪く凍てつく罵頭観音周辺の整備等々、地域全般に渡る整備をお助け隊主導で住民共々実施、大変喜ばれている。これらの活動は引き続き、自治区の交付金の採択により実施してきたが、本年は頂けなく「むらづくり」は休止に至った。

また、生物多様性を学ぶと題し、自然観察会、稲作体験など、都市交流の一環とした活動も多く実施、これらの活動は現在も継続している。素晴らしい景観と環境に恵まれた千枚田は「東海美の里百選認定」

「田園自然再生活動コンクール」農林水産大臣賞、「美の里づくりコンクール」審査会特別賞など数多くの認定、賞を賜っている。

平成二十三年開催の生物多様性国際会議(COP10)においては、愛知県の招致活動に貢献、同会議のエクスカージョン会場として世界各地から多くの方が訪れるなど、「日本の顔」として世界に名を馳せた。

千枚田を訪れる人々もサミット開催時は全国の参加者を含め約四



千人であったが、美しい景観、多様な環境にメディアも頻繁に取り上げ、放送するたびに見学者も増え、現在では年間二万人を超す人々が「憩い」、「癒し」を求め、訪れる

「市・県の顔」としてゆるぎない地位を築くことができた。

世間面には知名度も上がり、大勢の人に癒し、憩いの場を提供しているが、足下では、百姓達は「他所からやたらに大勢が見に来るから、らんどくにしておくれん」、「今日も草刈雅男だ」と、年に七回も八回も草刈りを行ったり、施設保全管理、イベントに駆り出されたり、只でも厳しい条件の小さな段々田んぼに、嫌でも、我慢して棚田の保全をしているのが実状であり、二十二戸の百姓も二万人の来訪者から「大変ですね」と、稀に聞か「手伝いましよるか」などと腐つても聞いたことはないが、作り笑顔で応じている。喜びと愚痴をつらつら述べたが、サミット開催から十年。「地域の宝、四谷の千枚田」が連谷地区にもたらした功績は間違いなく大きい。しかし、十年の歳月は誰しも十歳、年を食ったことになる。

サミットを成功させたあの感動と千枚田が取り持つ地域の絆をもう一度、再確認するため「サミット開催十周年記念シンポジウム」を九月五日(土)、午前十時から現地見学会(自由参加)、午後一時から連谷小学校を会場にシンポジウムを開催します。地域発展のため、収穫の秋で忙しい時期ですが万障繰り合わせのうえ、大勢の参加をお願いします。(詳細はチラシでお知らせします)

山里の魅力創造社

人口減少、高齢化が進む三河山間地域において、観光客数の増加による地域経済の活性化、にぎわいの創出を図るため、愛知県では、テレビやインターネット、紙媒体等様々なメディアを活用したPRキャンペーンを展開するとともに、実際に現地の魅力を体験できるバスツアーを年間を通じ運行、三河山間地の魅力を盛り上げる目的で開催。

「あいちの山里で暮らそう八十日間チャレンジ」の新城市チャレンジスタッフに従事した加藤夕沙さんと一般参加者四十名が七月三日、千枚田を訪問し、(舜)がその魅力をアピールした。

第六回中部環境先進五市サミットin根羽に参加して

七月七日、長野県根羽村 老人福祉センターにおいて環境を重視する中部地方五市(多治見(三)、安城(三)、新城(三)、掛川(三)、飯田(二))の市長サミットが当番市の安城が水源地である根羽村を会場に「水源地の安定的な供給が森林整備と保全の恩恵であること」を認識し、その供給を守るため、流域に関わる住民がそれぞれの地域を思いやるとともに、共に手を取り合って持続可能な

流域社会の形成を目指すため、「水環境の保全と流域社会の持続可能な発展」をテーマに開催された。

新城市では水源の涵養、里山の環境整備、生態系の保護活動に様々なプログラムを用意、都市・企業とも交流を広げている事例として「四谷の千枚田」を題材にパネルなどでアピールした。



市民情報交換会で(舜)は、木材の低迷から森林が放置化され、湧水が枯渇、昭和四十年頃と比較すると渇水期の河川水は三分の一と、危機的状況であると提言した。

モリアオガエルとビオトープ

今年も六月初旬から千枚田の周辺でモリアオガエルの産卵が見られた。平成十四年に保存会が造成したビオトープに親子観察会の折、モリアオガエルのオタマジャクシを移植、記念に植えたナンテンにも産卵が見られたし、昨年英国BBCが取材した杉の枝にも産卵があった。BBCが連日撮影を行った新城市最大の繁殖地が植林され、産卵場所が失われたが、周辺での個体数の増加はなかった。



また、愛知県第一号の小水力発電装置の貯水池の壁面に四個体の産卵を確認、生息環境条件を考慮し、横浜ゴム新城工場が取り組む生物多様性活動の一環として造成したビオトープ(ふれあい広場横)に社員の手で移植して頂いた。

たわごと

十一日、七月になって初めての天気、今日は、田んぼの草刈りだと、装束を整え、混合油も持ってバイクで颯爽と田んぼへ、何か変だ??? そうだ、肝心の草刈り機を忘れてきてしまった。情けなくて泣くにも泣けない。「加齢性痴呆症」と自己診断した。とホホ・・・



発行 平成二十七年七月二十日
鞍掛山麓千枚田保存会
文責 小山舜二